

徳之島諸方言の名詞アクセントの記述的研究

金, 娥璘

<https://hdl.handle.net/2324/4784376>

出版情報 : Kyushu University, 2021, 博士 (文学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 金 アリン

論 文 名 : 徳之島諸方言の名詞アクセントの記述的研究

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、徳之島 19 方言における名詞アクセント体系を記述し、それを基に徳之島祖語から各方言に至るアクセントの成立過程を描くことを目的とするものである。

第 1 章では、徳之島諸方言の音素体系や徳之島の地理的な位置など、本論文の前提知識となるような基本的な情報について述べた。

第 2 章では、徳之島諸方言のアクセント研究に関係する先行研究について概観した。徳之島諸方言のアクセント研究は、特に浅間方言を中心として、半世紀以上にわたる蓄積があるものの、データの記述と観察の段階において不備が認められる。とりわけ”母音の伸び”の取り扱いが不十分であって、そのためにアクセント体系の分析も複雑なものになってしまっている。本論文においては、”母音の伸び”について詳細な確認調査を行い、①基底から辞書的に存在する母音の伸び、②表層で単純な音声現象として生じる母音の伸び、③基底にあるアクセント情報に関係して表層に生じたと考えられる母音の伸びの、大きく 3 つの種類に分類し、音韻的にアクセントと関係していてアクセントを論じるうえで重要なものと、音声的な現象に過ぎず、アクセントの計算からは外せるものを見分けることに成功した。それによって 3 章以下で論じるアクセント体系の分析が先行研究に比べて非常に簡潔なものにできることとなった。

第 3 章では、徳之島の 19 集落で筆者自身が 2013 年 9 月から 2019 年 3 月までに調査したデータにもとづいて、徳之島諸方言の共時的な名詞アクセント体系について論じた。調査した語彙リストは通時的な分析につなげることも考慮して、基本的に松森 (2012) の「系列別語彙」に基づくものとし、名詞単独 (方言ごとにおよそ 250 語程度ずつ) とその助詞付きのアクセントについて調査している。調査したアクセントデータを方言ごとに検討して、各方言の共時的アクセント体系を示した。その結果、調査したすべての徳之島諸方言は「モーラを数えの単位として、昇り核を持つ、3型もしくは4型アクセント体系」という結論を得た。さらに、共時的なアクセント体系の観点から調査した 19 集落の方言は大きく 3 つのグループ (本論文中では“群”と呼んでいる) に分けることができると分かった。このように、筆者は 19 集落の調査をし、諸方言を大きく 3 つの群にも分けることはできたが、同じ群のアクセント体系が特定の地域に固まっているという地理的分布にはなっていない。第 4 章の通時的視点から考えると (限りなく) 同じアクセント体系であるという分析ができたのは、兼久方言、瀬滝方言、西阿木名

方言と岡前方言、松原方言の 2 グループだけであり、これは全体的にみて、徳之島諸方言が共通する祖語（徳之島祖方言）を持っていることに疑いはないが、徳之島祖方言以降には各集落が隔絶された期間が長いということが推定できる結果であった。

第 4 章では、第 3 章の共時的アクセントの分析に基づいて、徳之島諸方言のアクセントが推定される祖語（徳之島祖方言）からどのような変化をしたかについて論じた。第 3 章で述べたように、徳之島の各集落は隔絶された期間が長いと思われ、各方言のアクセント体系については、類似した点はあるものの、基本的に全く同じ体系を持つものは少なく、徳之島諸方言全体を俯瞰すると多様性に富んだ様相を示している。しかし、本論文の分析ではそれらの方言が祖語から経た変化過程を類推した結果、全方言が経験した可能性のある変化は最大でたった 4 種類しかないことがわかった。それら 4 つの変化はいずれも言語学的な動機があると言えるものであって、各方言が個々に独立して経験してもおかしくはないものである。結局、現在の各方言のアクセント体系の違いというのは、それら 4 種類のうちの何種類をどの順番で経験したかということの違いに過ぎないということを明らかにした。このように、多様なアクセント体系を限られた変化の組み合わせで説明することができた。

第 5 章では、以上の内容をまとめ、本論文の調査・分析が及ばなかった点を残された課題として挙げた。

最後に、付録として資料編を付けた。先行研究では実際の資料が添えられていないものもあるが、本論文はこの資料編に調査したすべてのデータを収めている。また、資料編は本論文の分析を反映しつつ、なるべく生の音声を復元できるようなデータの提示の仕方になるように努め、今後の研究に貢献できるものにした。